平成２９年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	中部教育事務所	学校名	花巻市立花巻北中学校	ＴＥＬ	０１９８－２４－８７６６

ユニバーサルデザインの手法を取り入れた授業改善をめざして

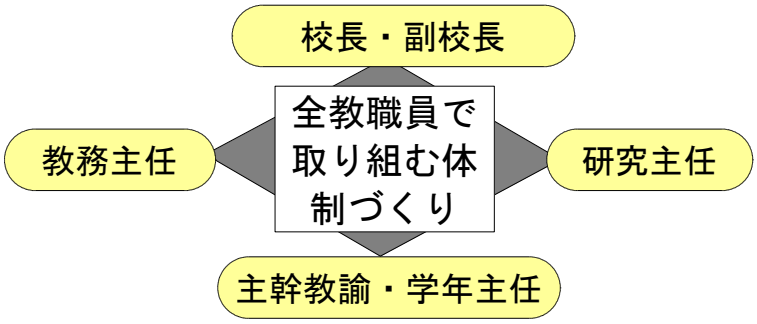
【今年度の目標】

（１）「授業が分かる」生徒を増加させる。
（２）県比１０ポイント以上の差の問題に取り組ませ改善を行う。
（３）家庭学習時間１時間以上とする割合を増加させる。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

今年度本校では「各種調査結果を活用した学力保障」、花巻市教育委員会指定の「小中連携強化事業」（２９年度～３０年度指定）「授業実践公開研究会」（２９年度～３０年度指定）の３研究について取り組んだ。この３つの取組を推進するための校内体制を以下のように整備し、全教職員で取り組んだ。

（１）校長・副校長の指導の下、組織的・効率的に推進できる体制の構築と各主任層との連携を図りながら校内体制を整備した。
（２）教務主任は、主に本研究を担当しながら学力向上に向けて各種行事の調整や研究主任・主幹教諭と連携を図りながら教育課程の円滑な推進を図った。
（３）研究主任は、来年度の授業実践公開を見据え、本校の研究の中核を担うユニバーサルデザインの手法を生かした授業づくりを推進した。
（４）主幹教諭・学年主任は、学力向上の要素の一因を「学級づくり」と捉え、好ましい人間関係の形成を図る取組を推進した。



今年度の具体的な取組
○「学力向上アクションプラン」（岩手県版の「『確かな学び、豊かな学び』実現プラン」の花巻市版）の共通理解
○主任層を中核とした全教職員参加による課題解決のための取組
○教員相互の授業参観（１人１授業公開）
○家庭学習の充実
○スクラムプロジェクトの推進（小中連携強化事業）
○各種調査結果の分析

【具体的な取組】

（１）「授業が分かる」生徒の育成のために

本校は平成２９年度・３０年度の２年間、花巻市教育委員会から指定を受け、「一人ひとりがわかる授業を目指して　～基礎・基本の確実な定着をユニバーサルデザインの手法を生かして～」を研究主題・副題に掲げ、全教職員が同一歩調で取り組んでいる。

具体的な取組として

ア　「環境づくり」

黒板まわりの授業と関係のない掲示物の除去や教室環境の整備

（教室前面の掲示は必要最低限に）

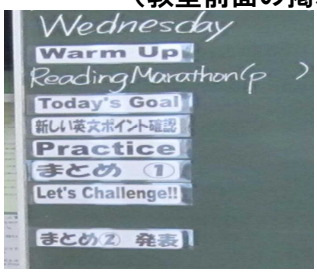
イ　「視覚化」

簡潔な指示・説明を与えることに加え、生徒の理解を補助する情報の視覚化

ウ　「構造化」

時間（流れ）の構造化、場所の構造化、学習スタイルの構造化

・「学習課題」「学習の振り返り」を大事にした授業



（本時の流れを生徒に提示すること、今どこをやっているのか、授業の流れを構造化する）

・基礎基本の定着を図るための学習形態の工夫
（ペア・グループ等）
・視覚的な工夫（学習課題の明確化、学習の流れ、ゴールの確認）

（視覚的に捉えられる学習プリントの工夫）

エ　「協働化＝学び合い」

授業の中に、自分の考え、他の人の考えを説明し合う場面の設定

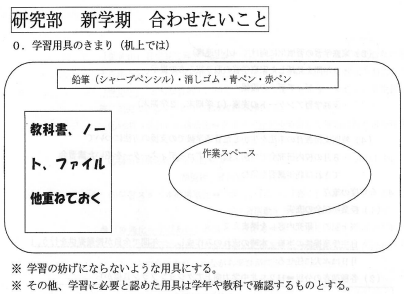
（自分の考えを相手に伝える場の設定）

（２）授業改善の推進

ア　授業に臨む姿勢・態度を「学習のきまり」で再確認

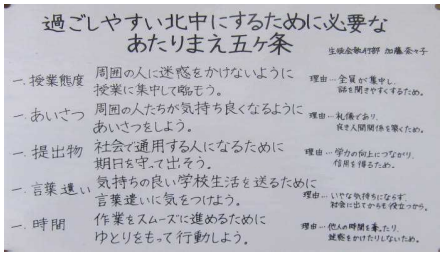
・学習用具のきまり（机上では）

右の図は、今年度の学習用具のきまりとして、机上に出してよいものを全校で確認したものである。小学校では学習の妨げにならない用具を使用すること、また机上に出す物を、教科書、ノート、下敷き、鉛筆、消しゴム、赤ペン・青ペン、ミニ定規としている。このきまりを受けて、中学校に入学した生徒が学習環境の変化に戸惑わないよう、極力小学校の流れを踏襲するように取り組んでいる。



・「過ごしやすい北中にするために必要なあたりまえ5ヶ条」の徹底

生徒総会の場で、みんなが過ごしやすい北中を自分達の手で創りあげようとする取組として「あたりまえ5ヶ条」を採択し、生徒会活動の一つとして取り組んでいる。授業態度、あいさつ、提出物、言葉遣い、時間を5つの目標として設定し、生徒の自治活動にも力を入れ、積極的



・開発的な生徒指導を目指している。

イ　全教員による自主授業の提供

今年度は、一人一授業を提供し、研究授業実践の取組を行った。教員同士が互いの授業を提供し参観することにより、授業者はもちろん参観者の研修の機会となるようにし、授業改善及び授業力の向上を図るための研修を効率的に実現することができた。

（英語の授業風景。この後ワークショップ形式での研究会）

ウ　主体的で深い学びを取り入れた授業実践

新しい学習指導要領の方向性として、これまでの「何を学ぶか」という視点に留まらず、「何ができるようになるか」そして「どのように学ぶか」を見据えて改善を図る方向性が示されている。そのような中で本校では「どのように学ぶか」（主体的・対話的で深い学び）について、教員一人一人が意識し授業改善の推進に向けて取り組んだ。また、主体的な学び、深い学びについての捉え方を、中央教育審議会の答申を参考に、各教科においてより具現的な取組となるよう改善を図った。

【主体的な学び】とは
・学ぶことへの興味や関心を持たせる。
・毎時間、見通しを持って粘り強く取り組ませる。
・自らの学習をまとめ、振り返ることで、次の学習につなげる。

【対話的な学び】とは
・あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気がついたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする。
・生徒同士の対話に加え、生徒と教員、生徒と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る。
・実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広める。

【深い学び】とは
・目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成したりしていく。
・事象の中から自ら問いを見いだし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む。
・精査した情報を基に自分の考えを形成させる。

○数学科における主体的で深い学びを取り入れた授業実践例

【どのように学ぶか】

（１）ユニバーサルデザインの活用（授業のパターン化）

①本時の学習課題の提示 ➡ ②１時間の授業の流れの確認（時間配分も含めて）

➡ ③学習形態を工夫した授業構成 ➡ ④まとめ ➡ ⑤振り返り

※「聞く」「書く」「見る」「考える」などの時間配分の明確化（ＩＣＴを活用した授業の展開）

（２）主体的で深い学びのために

ア　学習形態を工夫した授業 ➡ ペアや４人グループを使っての学習

※分かったことを他の生徒に伝え、教えることで協同的な学びにつなげる。

イ　最後まで解こうとする生徒の育成 ➡ 言語活動の充実とアクティブラーニングの手法を取り入れた授業展開

①書いて解く、相手に話して理解を深め、確かなものにする

②定着のための「補充的な学習」「発展的な学習」を授業に位置付ける

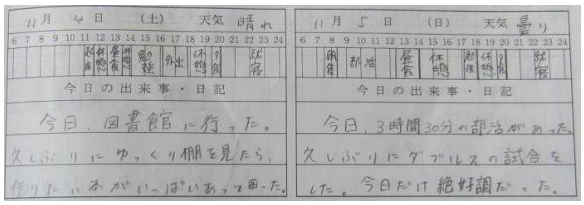
（３）家庭学習の充実

ア　授業と連動した課題プリントの作成（エを参照）

イ　自主学習ノート（あすなろ）の取組と活用(エを参照)

ウ　「学習と生活の記録ノート」による家庭学習時間の確認

エ　「あすなろノート」未提出者へのアプローチの仕方



（学習と生活の記録ノート）

自主学習ノートの取組は各学年毎に取り組んでいる。各学年ともに概ね１日２ページの取組としている。ノートの使い方については、左側のページは教科担任から出されたプリントを取り組むページ、右側のページは自分で考えて取り組むページとしている。また、ＰＴＡと連携して、課題提出を優先させるよう、部活動顧問や外部コーチとも連携している。どうしてもできない生徒については、部活動の休止日の月曜日を活用している。

オ　小・中連携と家庭の協力による家庭学習強化週間（ノーメディアweek）の設定

今年度から小学校と連携し、家庭学習強化週間（ノーメディアweek）を設定した。中学校の定期テストに合わせ、中間テスト３日前、期末テスト５日前は、テレビ、ゲーム、携帯電話等に気を取られず、家庭学習に集中できるよう家庭の協力を得た。この取組に関して生徒・保護者からアンケート調査を行った。

※上段：家庭学習強化週間（ノーメディアweek）の家庭学習時間

①学習時間について　　※下段：家庭学習強化週間以外の平日の家庭学習時間

	２時間以上	１時間３０分以上	１時間以上	３０分以上	ほとんどしない
全　体	４３．３％	２３．５％	２３．２％	５．５％	４．６％
11月	１３．６％	１８．５％	３８．５％	２２．１％	７．３％
全　体	４０．５％	２５．９％	２１．７％	６．８％	５．１％
６月	６．５％	１７．４％	４１．６％	２５．４％	９．１％

②保護者からのアンケート内容について

Ｑ　お子さんは強化週間で特にどんなことを頑張っていましたか。

・普段より勉強時間が増えた　・普段と何ら変わらなかった　・苦手教科克服に取り組んだ

・以前よりも「やる気」が出たようだ　・毎日の計画を立てて取り組んでいた　・早朝学習にした

・学習時間は変わらなかったがとても集中した　・強化週間より前から取り組んでいた

Ｑ　家庭ではどんなことに気をつけていましたか。

・テレビを消す、携帯・スマホ・タブレット・ゲーム機を預かる

・自分から進んで学習するので特に何もしない

・一緒のテーブルに着き、親は読書などをしていた　・何の勉強をするのか本人に確認した

・子どもの好きなおかずを作る、おいしいご飯を作る　・できるだけ一緒に問題を解いてみたりした

（４）学校独自の取組

ア 「学習コンクール(漢字･計算･英単語)」の開催

生徒の基礎学力、学習意欲の向上を図るため、年に３回全校生徒対象の学習コンクールを学習委員会が中心となり開催した。

問題数は漢字と英単語を１００問、計算は５０問とし、全校生徒が同一問題で取り組んでいる。生徒は学級対抗や満点賞獲得に向けて意欲的に取り組んだ。

賞状

第一位　三年一組

あなたの学級は平成二十九年度校内漢字学習コンクールにおいて学級で協力し合い優秀な成績をおさめました
よってその栄誉をたたえここに表彰します

平成二十九年七月二十五日
尼巻北中学校　学習委員長
島崎朱里

イ 「学校生活アンケート」の活用

まなびフェストの学校関係者評価（保護者）を行いながら、同様の項目について生徒にもアンケートを行い、生徒の学校生活の改善・学習に対する意識の向上を図る資料として活用した。また、各教科の自己評価を生徒に行わせることで、生徒一人一人が各教科の取組を振り返り、自分の学びについて考えるきっかけとした。さらに、生徒の評価を教職員が共有することで、「どのように学ぶか」について、教師側の授業改善の推進に役立てた。

【成果】

（１）今年度の目標に対する達成状況

ア 「授業が分かる」生徒を増加させる

「授業が分かる」生徒の育成については、昨年度からユニバーサルデザインの手法を用い、全教職員で取り組んできた。特に、学級内における最初のバリアを①クラス内の理解促進（失敗を笑わない学級の雰囲気づくり、得意・不得意を認めた互いの理解）、②ルールの明確化（生徒が安心して参加できるルールや進め方）と捉え、ＱＵや教育相談を活用し、望ましい人間関係づくりに力を注ぎ、安心して授業に参加できる雰囲気を構築してきた。その結果、調査開始から２年間で徐々にではあるが「分かった」「できた」と思える生徒の割合が増加した。

【授業で「分かった」と思えることがある(県学調と生徒アンケート)の比較】

	よくあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
29生徒ア	３１．４％	５０．６％ ↑	１６．８％	１．２％ ↑
29県学調	３４．０％	４２．８％	１６．８％	７．４％
28県学調	３１．２％	４４．０％	１８．４％	６．６％

イ 県比10ポイント以上の差の問題に取り組ませ改善を行う。

【平成28年度の県比10ポイント以上の差の問題で、今年度と比較できる問題との比較】

教科	調査問題のねらい	問題番号	平成28年度 県比	平成29年度 県比
国語	話の内容を大体とらえて聞くことができる	１	＋１６．８	＋５１．７
		２	－２２．９	＋４７．４
		３	＋０．２	－２．３
社会	経度差から時差を読み取ることができる	１１	－１１．８	＋１４．５

過去問題の分析結果を基に、県比１０ポイント以上の差がある問題に重点を置き指導を行った。結果、類似問題については、プラスへ移行している。上記以外の教科については類似問題なし。
各教科、領域・観点内容別に県と比較すると、マイナスは最大６．７（国語の書くこと）であるので、来年度は「書くこと」に重点を置き指導を行う。

ウ 家庭学習時間１時間以上とする割合を増加させる

家庭学習の取組については「（３）家庭学習の充実」でも記したとおり、自主学習ノート（あすなろ）の共通した取組や、小・中の連携、家庭への協力依頼、ＰＴＡとの連携等を通し、生徒の意識向上はもとより、保護者や地域にも家庭学習の重要性について共通理解を図ることができた。また、保護者アンケートの結果を見ると、家庭学習取組に対する保護者の意識は高く、協力的な家庭が多かった。但し、平日の家庭学習の取組や時間の確保については課題を残した。

（２）今年度の取組の成果

今年度の本校の研究として、本調査をはじめ、小・中連携の取組、来年度の授業実践公開研究会に向けた取組を並行しながら進めてきた。その成果として大きく４点について捉えた。

① 本校の研究課題であるユニバーサルデザインの手法を生かした授業を教職員が同一歩調で取り組むことができた。

② 小学校と連携を図ることで「学習のきまり」や「家庭学習強化週間（ノーメディアweek）」等、９年間を見通した取組と円滑な接続を図る手立てを推進することができた。

③ 全国学調や県学調を分析し、授業改善に生かすことができた。

④ 全職員で学調問題を解くことに取り組み、つまずきの要因を把握した。